

南米のイタリア移民 ——ブラジルとアルゼンチンを中心に——

北村 暁夫

はじめに

19世紀以降、20世紀前半までのヨーロッパの人間の移動に関する歴史を見ると、ヨーロッパ人が海を渡り、南北アメリカやオセアニアに向かった時代であると言えます。ヨーロッパの外からヨーロッパに向かって多くの人が入るという現在の状況とは全く逆であるわけです。その中で、イタリアからの移民は数量的に見ても大きな比率を占めています。もちろん、人口に対する移民数の割合を考えると、人口規模の小さいアイルランドやノルウェーなどはイタリアよりも大きな人口比の移民を送り出しています。しかし、イタリアはヨーロッパの中では人口規模の大きな国ですので、絶対数という観点から言えば、ヨーロッパでも有数の移民大国であったと指摘できます。

近年、世界の各地で移民や難民に対する住民のまなざしが厳しくなっていますが、移民に対する排外的な動きというのは今になって初めて起こったことではありません。19世紀にもそうした動きは存在していて、とりわけ1890年代には移民排斥の動きが顕著でした。イタリア移民に対する排斥もそれなりに激しいものがあって、1891年にはアメリカ合衆国ルイジアナ州ニューオリンズで、1893年には南フランスのエグモルトというところで、それぞれ10人前後のイタリア人が殺害されるという事件も起きています。イタリア移民は規模が大きかったこともあって、各国で排斥の対象とされるという経験をしています。

イタリア移民が向かった先で最も多くの人が行ったのはアメリカ合衆国ですが、アルゼンチンやブラジルといった南米諸国も多くのイタリア人が移民として到来しました。ある意味では、もともとの人口に対する流入したイタリア移民の比率を考えると、アメリカ合衆国よりも南米諸国の方がイタリア移民の重要性は大きかったのです。とりわけアルゼンチンやウルグアイなどについてはそれが該当します。そこで、今日は南米の二大国であるブラジルとアルゼンチンにおけるイタリア移民を比較的に見ることで、南米諸国におけるイタリア移民の果たした役割について考えてみたいと思います。

1. イタリア移民の歴史的概観

最初に19世紀後半から20世紀前半にかけてのイタリア移民について、統計資料をもとに数量的な概観をしておきたいと思います。イタリアは1861年に統一されましたが、統一から1922年のファシズム政権成立までの時期を現在のイタリアの歴史学では「自由主義期」と呼んでいます。日本でいえば幕末から明治、大正中期までの時期に相当します。まずこの時期のイタリア移民について見ることにします。

イタリアで移民の統計が公式に取られるようになるのは1876年です。1876年から1925年までの間に、1670万人の移民がイタリアから諸外国に出ました。そのうちの8割近くが男性で、15歳以上の比率が88%に達します。これは何を意味しているかという点、この時期のイタリア移民の大半は帰郷することを前提とした人々、つまり出稼ぎであったということです。ですから、1670万人の移民がすべてイタリアを去って戻ってこなかったわけではなく、むしろ多くが帰国したということになります。もちろん、その一方で帰国せずに、そのまま移民先に定住した人々も多くいたことを忘れてはなりません（図1参照）。

イタリア移民が一番多かった年は1913年です。この年だけで87万人が移民となりました。その翌年の1914年に第一次世界大戦が始まっていますので、仮に戦争が始まっていなければ、1914年ももっと増えていたという可能性もあります。

移民の出身地については、60%が北イタリア、中部イタリアで、南イタリアが40%でした。イタリア移民というと南イタリア出身者を思い浮かべる方も多かもしれませんが、実際にはこの時期の移民の場合、北中部の出身者の方が多かったのです。ただし、アメリカ合衆国については南イタリア出身者が圧倒的多数を占めています。彼らの存在がイタリア移民のイメージを作るうえで、大きな役割を果たしていると言えるのかもしれません。イタリア統一から間もなくの時期は北イタリア出身の移民が非常に多かったのですが、次第に南イタリア出身者が多

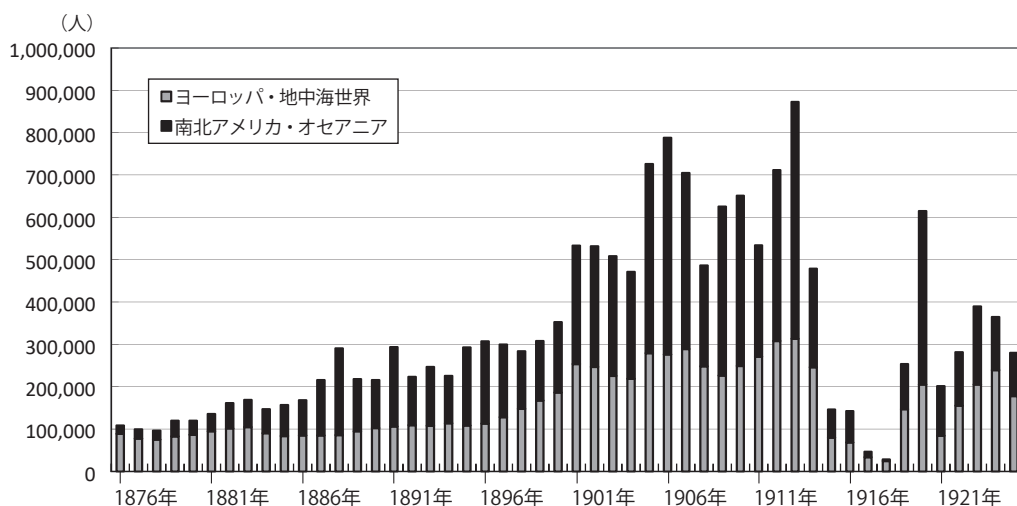


図1 イタリア移民の数量動態 (1876-1925)

くなっていくという傾向があります。特に20世紀初頭にはシチリアを中心とした南イタリアの人々が、アメリカ合衆国を中心とする南北アメリカ諸国に向かうことになります。

移民の行き先について見ると、アメリカ合衆国が約30%、フランスが16%、アルゼンチンが13%です。本日取り上げるもう一つの国ブラジルは8%で、スイス、オーストリア・ハンガリーに次いで6番目に多くのイタリア移民が向かった国でした(図2参照)。大きな地域で括ると、ヨーロッパ・地中海地域が46%、南北アメリカ・オセアニアが54%ということになり、両者はほぼ拮抗しています。それだけ広範な地域にイタリア移民が散っていったということになります。

次に、イタリアの出身地域と移民の行き先との相関を見ると、イタリアの北中部の人々はかなり高い比率でヨーロッパ・地中海地域に移民しています。海を渡って南北アメリカに向かった人々もそれなりにいましたが、大半の人々はアルプスを越えてヨーロッパの北の方に向かったわけです。これに対して、南イタリアからはほとんどの人々が南北アメリカに向かいました。

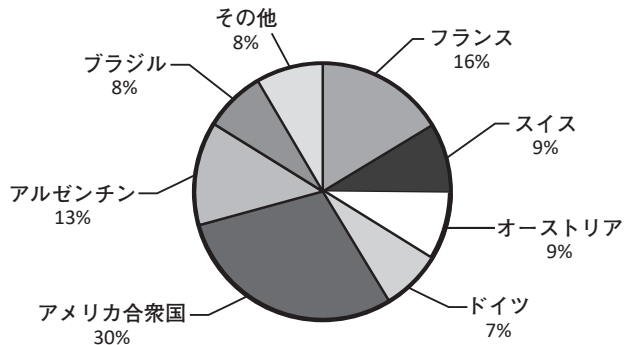


図2 イタリア移民の目的地 (1876-1925)

これが一般的な傾向ですが、ここで注目されるのが、本日お話しするアルゼンチンとブラジルです。この二つの国に向けては、イタリアの南北を問わないさまざまな地域から移民が出ています。ブラジルの方がアルゼンチンに比べて北イタリア出身者の比率がいくらか高いという傾向はありますが、総じてイタリアの出身地域の偏りが少ないというのが、ヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国と比べた際のアルゼンチンとブラジルの特徴となっています。この点は重要ですので、あとでもう少し詳しくお話ししたいと思います。

先ほども触れたように、イタリアからの移民は単身の男性が多く、帰郷を前提とする出稼ぎ的な人たちが多い傾向にありました。彼らは移民先でどのような職業に従事したのでしょうか。これだけの膨大な数ですので、農業、工業、商業などきわめて多様な職業に従事したのですが、特徴的なものを挙げるならば、第一に建設労働者です。19世紀後半から20世紀初頭にかけてはヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国では都市化が急速に進展しましたが、道路や鉄道、港湾、住宅など都市のインフラストラクチャー整備のために大量の建設労働者が必要とされました。イタリア移民はこの建設労働において一つの大きな供給源となりました。また、数の上で大きな割合を占めたわけではありませんが、靴職人といった伝統的な職人的労働や行商、大道芸人といった存在は、さまざまな国でイタリア移民を表象する職業として記憶されています。

第一次世界大戦と第二次世界大戦の間のいわゆる戦間期、つまりイタリアではほぼファシズム期に相当する時期には、イタリア移民は大幅に減少します。戦争によるヨーロッパ諸国の経済的疲弊や、アメリカ合衆国における移民制限、南米諸国における景気減退といった経済的事情が最大の理由ですが、ファシズム政権による移民禁止措置も影響しました。移民禁止といっ

でも呼び寄せなどは許容されていたので、実際には国外への流出は継続されていたのですが、数量的に激減したことは確かです。

第二次世界大戦後になると、イタリアからの移民の構図は大きく変わります。ファシズム期に移民が制限されたこともあって、特に南イタリアでは人口が過剰な状態になります。多数の失業者を抱えるという状況にあったため、イタリア政府はさまざまな国と協定を結び、南イタリアから組織的に移民を送り出すという政策をとります。最初に協定を結んだのはフランスですが、その後にスイスや西ドイツ、ベルギーなどとも協定を結びます。その結果、南イタリアからヨーロッパ諸国に移民が向かうという、自由主義期とは異なる状況が現れることとなります。1946年から1975年までの30年間に760万人という移民が出ていきます。もちろん、ここでも帰国した人も多くいますので、すべてが流出したわけではありませんが、第二次世界大戦直後のイタリアの人口が4000万人程度であったことを考えると、大きな数です。また、ヨーロッパ諸国が中心と言いましたが、カナダやオーストラリアなどへの移民も増えますし、本日のテーマとの関連でいえば、アルゼンチンやブラジルへの移民も存在しました（図3参照）。

近年のイタリアは全く異なる状況にあります。1970年代半ばより、イタリアから外国へ出ていくよりもイタリアに流入する移民の方が多くなります。1990年代に入ると移民の数が急増し、さらに2000年以降は流入する移民が爆発的に増加しました。2001年には133万人であったイタリアの外国人人口は2015年に500万人という数に達します。急増の理由はいろいろありますが、最も重要なのは介護労働・家事労働に従事する外国人が急増したことです。その多くが女性でした。典型的なのは、高齢者世帯に住み込んで家事や介護に従事する女性たちです。ルーマニアをはじめとしてウクライナ、モルドヴァ、ベラルーシ、ポーランド、ブルガリアといった東欧諸国出身者が多いことも特徴的です。このように、20世紀末になると、イタリアは移民送り出し国から受入国へと劇的に転換を遂げたのです。

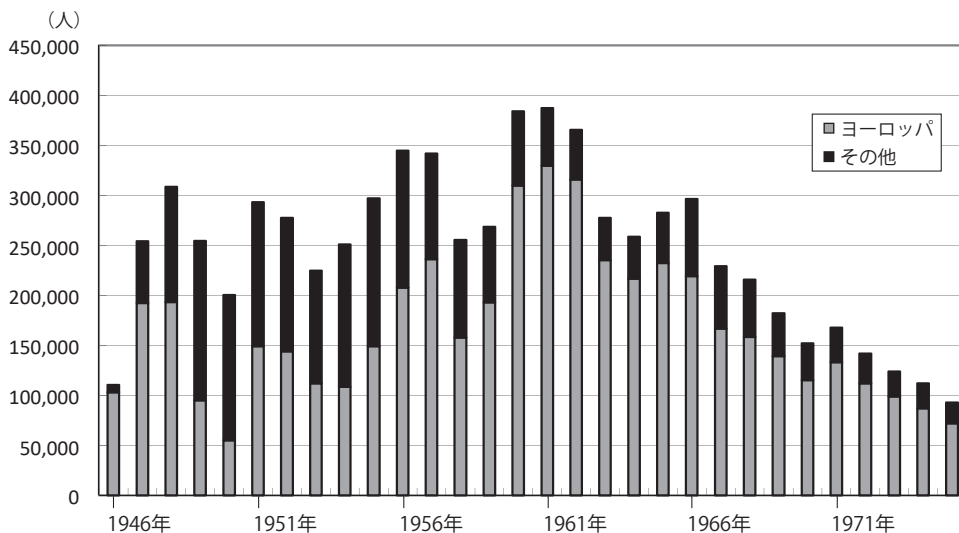


図3 イタリア移民の数量動態 (1946-1975)

2. アルゼンチンのイタリア移民の歴史

ここから本題に入ります。まずアルゼンチンにおけるイタリア移民の歴史について見ていきます。イタリア側の移民統計によると、1876年から1925年までの時期にイタリアからアルゼンチンに渡ったのは217万人で、同じ時期のイタリア移民全体の13%を占めます。他方で、アルゼンチン側の移民統計によると、1857年から1897年までの間に、イタリアから105万人の移民が入国しています。同じ時期の移民の総数が236万人ですので、全体の45%を占めています。私が入手できたのが1898年の国勢調査なので、1897年までのデータで恐縮ですが、この時期にアルゼンチンに入った移民の二人に一人がイタリア人であったということになります。19世紀末になるとスペインからの移民も急増し、イタリア人とスペイン人がこの時期のアルゼンチンにとって最も重要な移民集団でした。

アルゼンチンをご承知のとおり、19世紀前半の段階では非常に人口規模の小さな国でした。1869年の国勢調査でも人口は174万人にすぎません。それが1895年に396万人、1914年には790万人へと急増します。この増加ぶりは自然人口増だけで達成できるものではなく、イタリア人やスペイン人などヨーロッパからの移民の流入が大きく寄与しています。19世紀半ばからヨーロッパ出身の移民が流入したのは、アルゼンチン政府が積極的に移民を誘致したからです。1853年に制定された憲法では、「ヨーロッパ移民の積極的な奨励」(第25条)が規定され、入国した外国人に対しては「国民に保証されたすべての公的権利を享受する」(第20条)とされました。起草された憲法に大きな思想的影響を与えたフアン＝パウディスタ・アルベルディは、かつて「統治とは植民である」と述べています。

アルベルディはスペイン植民地体制下ではびこったと彼がみなしていた怠惰や奢侈といった悪弊を、禁欲と勤勉を備えた人々の入植によって克服しようとしていました。具体的に彼が入植者として想定していたのは、「イギリス人、ドイツ人、スイス人、北アメリカ人」といった西欧・北欧に起源を持つ人々だったのです。実際、スイスからの入植者を奨励する政策も採られたのですが、これはあまりうまくいきませんでした。結果的に、アルゼンチンに入植したのは、イタリア、スペイン、ポーランドといった地域の出身者でした。

イタリアからアルゼンチンに渡った移民たちはいかなる職業に従事したのでしょうか。19世紀後半のアルゼンチンはパンパを中心として、経済が急成長を遂げた時期でした。独立当初のアルゼンチンの主要産業は牧畜業であり、1870年頃までは穀物の輸入国でした。そこで、政府は自作農育成策を推進して穀物の栽培面積の増大を図ります。それが特に推進されたのが、ラプラタ川中流域のパンパ地方でした。いち早くアルゼンチンに流入したピエモンテやロンバルディアといった北イタリアの諸地域の出身者たちは、ラプラタ川を遡ってパンパ地方に入植しました。彼らのなかから、売却された土地を購入して中規模の自作農へと自立を遂げていく人が登場してきます。たとえば、コルドバ州では1906年までに600を超える入植地が形成され、その総面積は400万ヘクタールに達しました。その半分の200万ヘクタールが開墾され、126万ヘクタールで小麦栽培が行われました。また、400万ヘクタールのうち、113万ヘクタールが入植者の農民家族に売却され、自作農となった農民家族の数は4568に達しました。その約8割が

イタリア出身の移民だったのです。

しかし、入植地がラプラタ川の上流域まで到達すると、新たに開墾すべき土地が消滅していきます。アメリカ合衆国において19世紀後半に起きた「フロンティアの消滅」と類似した事態です。実際、アルゼンチンでも1890年代に入ると、入植者が自立した自作農となれる可能性は著しく低下していきました。その結果、新たに流入した移民は農業労働者として雇用されることになります。イタリアからやって来る農業労働者のなかには、アルゼンチンの収穫期がイタリアの農閑期にあたることを利用して、一年のうちの数か月をアルゼンチンで労働するということを毎年繰り返す人々もでてきます。彼らは毎年決まった時期に到来して帰郷することから、「つばめ（ゴロンドリナス）」と呼ばれました。

また、こうした出稼ぎ的な移民とは別に、アルゼンチンに定住するイタリア人農業労働者も増大しました。スペイン語でベオンと呼ばれる農業労働者は、労働の対価を日払いあるいは月払いの賃金として受け取りました。ですが、年間200日足らずの雇用日数では生計を満たすには十分でなく、そのために農閑期に周辺地域でレンガ工などの副業を行うことが一般的であったようです。こうした農業労働者には、北イタリア出身者に加え、南イタリア出身者も多く含まれていました。

その一方で、都市部に定住するイタリア人もいました。すでに述べたように建設業に従事する人が多くいましたが、それ以外にも食品加工業や繊維業などの工場労働者となったり、行商をはじめとする小売業で働いたり、さまざまな部門で労働に従事していました。また、アルゼンチンは憲法で外国人に対して自国民と同等の私的所有権を認めていたこともあって、企業経営に乗り出すイタリア人も相当数存在しました。その大半は規模の小さな企業経営者でしたが、食肉加工やパスタ製造といった食品加工、鋳物、繊維、家具製造といった分野に進出していきます。経営者の多くはイタリア北部の出身者でしたが、南部出身者も存在しました。

このように大量のイタリア移民が流入してくる状況に対して、受け入れ側のアルゼンチンの人々は彼らをどのように見ていたのでしょうか。アルベルデイが移民を積極的に誘致しようとしたときに想定していた対象が西欧・北欧の人々であったことからうかがえるように、イタリア移民はもろ手を挙げて歓迎されたわけではありませんでした。もともと中南米以外の地域から流入する外国人を指す言葉であった「グリンゴ」という言葉が、差別的なニュアンスをとらなつつイタリア人の代名詞として用いられるようになっていきます。都市化の進展とともに都市部での犯罪が増加すると、移民の流入が治安の悪化を招いたという議論がされるようになりますし、他方でイタリア移民の中から社会的な上昇を遂げる人々が現れるようになると、それを脅威とみなす論調も登場します。そして、第一次世界大戦後の1924年にはカルロス＝ネストル・マシエルという人が『アルゼンチンのイタリア化』という書物を出版し、その中でイタリア人のもたらす害悪を列挙したうえで「アルゼンチンのためのアルゼンチン」を作るべきだと訴えています。このようにイタリア移民に対する排斥的な動きは確実に存在していました。

しかし、19世紀末にアメリカ合衆国やフランスで起きたような暴力的な排斥事件は、アルゼンチンでは起きていません。一方的に排除するにはイタリア移民は数が多すぎたということもあるでしょう。そのなかで、流入する移民を統合する方法として、アルゼンチンではハイブリッ

ド化、異種混交という考え方が生まれることになります。つまり、もともとのアルゼンチンの文化に移民の文化が融合して新しいアルゼンチン文化が生まれるという発想です。この文化の融合を表象する言葉の一つが「ココリチェ」です。これはもともと、1880年代にブエノスアイレスの大衆演劇の世界に登場したイタリア語なまりのスペイン語を話す道化を指すものでしたが、そこから転じてイタリア移民の話し言葉を総称する言葉となりました。そもそもイタリア移民自体がさまざまな地域出身であるため、同じ移民であっても出身地域の異なる人々との意思の疎通が容易ではなかったのですが、そうした彼ら自身の意思の疎通と、さらにはもともとアルゼンチンに暮らすネイティブの人々との意思の疎通を図るものとして、ココリチェが生み出されていきました。

ココリチェは、1920年代以降イタリア移民の流入が減少し、アルゼンチンで教育を受ける世代が増加したことにより、次第に消滅していきます。しかし、その語彙や言い回しの一部はネイティブの話し言葉に取り入れられ、アルゼンチンのスペイン語として定着しました。こうして、アルゼンチンでは移民の文化の流入はネイティブの文化にも一定の変容をもたらし、同時に、変容して出現した新たなネイティブの文化の中に移民の文化が統合されていくという過程を経たのです。これがアルゼンチンにおける統合のあり方、ハイブリッド化です。イタリアから出身地域を異にする移民たちが大量に流入し、彼らが一元的な「イタリア移民の文化」を作り上げる前にアルゼンチン社会のなかに統合されていったために、アルゼンチンでは「イタリア系」というアイデンティティが作られることはなかったのです。

ところが、20世紀後半になるとそうした状況に変化が生まれます。第二次世界大戦後のイタリアが「経済の奇跡」と呼ばれた高度経済成長により先進国として発展したのに対し、20世紀初頭には世界でも一けたに入る国内総生産を誇っていたアルゼンチンは、その後の政治的混乱や農産物価格の低迷によって1980年代に経済危機に陥ります。イタリアとアルゼンチンの世界経済における地位が逆転したのです。ドイツの文化人類学者アルント・シュナイダーはこれを「役割の逆転」と名付けました。この役割の逆転の結果、人の移動にもまったく逆の事態が生じます。イタリアは移民受け入れ国へと転換し、アルゼンチンからは国外に出稼ぎに出る人が相次ぎます。かつてはイタリアからアルゼンチンに向かった人の移動の流れが、今度はアルゼンチンからイタリアへと向かうようになります。イタリアは外国人労働者の受け入れに際して、イタリアに起源を持つ人を優先したこともあり、アルゼンチンでは自らがイタリア系であることを証明する動きが活発化します。つまり、ここで初めて、「イタリア系アルゼンチン人」という認識が生まれるようになったというわけです。

アルゼンチンのイタリア移民に関する話の最後に、アルゼンチンのハイブリッド的な統合を示す例の一つとして、イタリアの食文化の受容と変容について触れておきたいと思います。イタリアの食文化を代表するパスタは、アルゼンチンでも日常的な食品です。ただ、一口にパスタと言ってもさまざまな種類があります。スパゲッティに代表される長麺はナポリなど南イタリアに起源がありますが、ラザーニャやラヴィオリなどはもともと北イタリアによく見られたものです。ところが、イタリアのさまざまな地域出身の移民が到来したアルゼンチンでは、当初からさまざまな地域のパスタが流入しました。今日では北イタリアでもスパゲッティは食さ

れていますし、南イタリアでもラヴィオリを食したりしますが、それが日常的な光景となったのは第二次世界大戦後のことであると言ってよいと思います。ところが、アルゼンチンではすでに20世紀初頭の段階からそのような状況が現れていたということになります。また、パスタはあまりにも日常的な食文化となっているため、アルゼンチンではそれが「イタリア料理」という形で認識されているようには思われません。

もう一つ面白い例が、子牛のカツレッツです。これはイタリア語では「コトレッタ・ミラネーゼ」と呼ばれていて、名前のとおりミラノの名物料理とされています。「コトレッタcotletta」は英語に入ってcutletとなり、それが日本語の「カツレッツ」、つまり「カツ」になりました。要するに、子牛の薄切り肉に衣をつけて揚げたものです。これが牛肉の生産大国アルゼンチンの料理にもあるのですが、アルゼンチンでは「ミラネサ」と呼ばれています。衣をつけて揚げるということの意味しているはずの「コトレッタ」が脱落して、「ミラノ風」というのが料理名として残ったのは少し奇妙です。でもより興味深いのは、塩とレモンで味付けするのが通常の「コトレッタ・ミラネーゼ」で、アルゼンチンの「ミラネサ」もそのようなものなのですが、アルゼンチンには味付けとしてトマト・ソースをかける場合があります。それは「ミラネサ・ナポレタナ」と呼ばれています。つまり、「ナポリ風ミラノ風」という名前の料理であるわけで、何とも妙な命名です。ですが、これこそがアルゼンチンのハイブリッド文化を象徴するものであると言えるのです。

3. ブラジルのイタリア移民の歴史

次に、ブラジルにおけるイタリア移民の歴史について見ます。イタリア側の統計資料によると、1876年から1925年までの50年間でイタリアからブラジルに移民した129万人のうち、イタリアの北・中部出身者が57%、南イタリア出身者が43%を占めました。当初は北・中部の出身者が圧倒的多数を占め、次第に南イタリア出身者が増えていくという変化はありましたが、イタリアのさまざまな地域の出身者が存在するという点で、アルゼンチンとの共通性は明らかです。他方で、ブラジル側の統計資料によると、1881年から1915年にブラジルに入国した外国人の数は297万人で、そのうちイタリア人は130万人、比率にして全体の44%を占めました。この時期に流入した外国人のなかでポルトガル人と並んで際立って高い比率であったことがわかります。

この時期にイタリアからブラジルに渡った移民は、大きく二つのグループに分けることができます。一つは、パラナ、サンタカタリーナ、リオグランデ・ド・スルというブラジル最南部の三つの州に向かった人々です。もう一つは、サンパウロ州を中心とした地域に向かった人々です。この二つのグループは、イタリアの出身地域やブラジルで従事した職種などを大きく異にしています。

南部三州にイタリアから移民が入ったのは、1870年代のことです。ブラジルの南部三州には、すでに1820年代以降、ドイツのモーゼル川流域やボンメルンといった地域の出身の移民が流入していました。それはブラジル政府が先住民を「文明化」し、地域の「白人化」を推進するために意図的に行ったことです。アルゼンチンで1850年代に採られた政策と類似したものが、い

ち早く行われていたのです。ただ、ドイツ系の移民はドイツの出身地域との関係がきわめて濃厚で、ドイツ文化を堅く維持し、ブラジル社会への帰属意識が長いこと低い状態にとどまったと言われていいます。

イタリア移民が1870年代以降にこの地域に流入したのは、ブラジル社会に統合しないドイツ系コミュニティに対抗させることを企図したブラジル政府によって推進されたからです。ブラジル政府はブラジル国内の移動費用を政府が負担することや、農民家族に有償で土地を提供することなどの政策を行い、イタリアからの移民を誘致しました。南部三州では、しばしば1875年がイタリア人入植の最初の年として記憶されています。この年にトレント地方出身のイタリア系の人々が入植したのですが、実際にはトレントはこの時期にはまだオーストリア＝ハンガリーの領土でしたので、厳密に言うとはらはイタリア王国の国民ではありませんでした。しかし、第一次世界大戦後は今日にいたるまでイタリア領ですし、彼らがイタリア語話者であったことも確かなので、それ以後に入植したイタリア人はトレント地方出身者たちを自分たちのパイオニアとして認識しているようです。いずれにせよ、1875年以降にこの地域に入植したイタリア人の圧倒的多数は、ヴェーネト地方をはじめとする北イタリア出身者によって占められていました。

イタリア移民は開拓者として南部三州に入植したのですが、彼らが入植したのはドイツ移民がかつて入植した土地よりも奥地、あるいは農業を行うのに条件の悪い土地でした。それでも彼らは森林を伐採し、最初は糊口をしのぐために豆やトウモロコシなどを栽培しました。その後、耕作が安定してくると、小麦やブドウの栽培を行います。もともと彼らの多くは北イタリアの山間・丘陵地帯の出身者であったため、ブドウ栽培に習熟した人もいました。ブドウ栽培とワイン生産は次第にこの地域の重要な産業になっていきます。

南部三州に入植したイタリア移民は総じてカトリック教会の影響力を強く受けていました。入植地には早い段階から教会が建設され、イタリアから司祭が派遣されました。サンカルロ会やサンラッファエーレ会など、イタリアにおいて移民支援の活動を行っている団体が入植地における信徒の組織化を支援しました。2016年9月に私がブラジルを訪れた際に、パラナ州の州都クリチバの近郊にあるサンタ・フェリシダージという町に行きました。この町はイタリア系住民が多いところですが、そこにあるサンジョゼ教会の隣にサンカルロ会の事務所を見かけました。南部三州におけるイタリアのカトリック教会の影響力をこの目で確認できた思いでした。

次に、もう一つのグループであるサンパウロ州に流入したイタリア移民について見ます。ご存知のように、サンパウロ州やその周辺は19世紀にコーヒーの世界的な産地となります。それはプランテーションという形をとり、奴隷の労働力に依拠していました。しかし、1888年に奴隷制が廃止され、奴隷は無償で解放されます。不足する労働力を補うためにヨーロッパから移民を導入することが計画され、1890年にグリセリオ法が制定されました。この法律により、契約移民に対して渡航費が無償で提供されることになりました。これを受けて、イタリアで契約移民を募集する活動が起きます。すでに奴隷解放以前の1887年に、ファゼンダ農場主マルティニョ・ブラドがジェノヴァに斡旋会社を設立し、1897年にはナポリにも支店を開設しました。こうした斡旋の結果、イタリアからブラジルに向かう移民の数は急増していきます。

イタリアの統計資料を見ると、ブラジルへの移民数は年によってきわめて特異な変動を示します。一般的に移民数の変動は、イタリアや移民受入国の景気変動に左右されますが、ブラジルへの移民はそれとはあまり関係なく、特定の年に集中して激増しているのです。具体的には1888年、1891年、1895年、1901年などです。特定の年に増えているのは、これらの年に集中的に斡旋活動が行われたことを示していると考えられます。これらの年にはイタリアのさまざまな地域でブラジルへの移民が増えています。こうして、1902年にはブラジルに在住するイタリア人110万人のうち60%にあたる65万人がサンパウロ州に居住するほど、サンパウロ州への集中が進みました。

コーヒー・プランテーションに入ったイタリア移民は、コロノと呼ばれる農民家族を単位に組織され、成人男性一人あたり2000本から3000本くらいのコーヒーの木の管理を農場主から委ねられました。コーヒーの豆が収穫されると、出来高払いで農場主から賃金を受け取りました。コロノは貯蓄に励み、耕作地を購入して自立した経営者を目指しますが、1890年代後半からコーヒー価格が低迷し、平均賃金が低下していったために、それはたいていの場合、見果てぬ夢に終わってしまいます。また、奴隷制時代の慣習を脱することのできない農場主たちは、しばしば自らが雇用する私兵の暴力によってコロノと対峙しようとしてきました。生活の苦しくなったコロノたちは次第にストライキといった手段で対抗するようになり、1913年にはサンパウロ州北部のリベイラン・プレトで大規模なストライキが発生しますが、結局鎮圧されます。コロノにとって最後に残された抵抗の手段が、農場からの逃亡です。彼らが行く先はサンパウロを中心とした都市部でした。

サンパウロ州のコーヒー・プランテーションに移民した人々がきわめて過酷な状況に置かれていたことは、イタリア政府にも次第に認識されるようになります。ついにイタリア政府は1902年に、渡航費を無償で提供された移民がブラジルに行くことを禁止します。自由主義期のイタリアは、移民を保護することに対しては一定の配慮をしていますが、基本的には移民の自由を政策に掲げ、渡航の禁止といった手段をとることはありませんでした。移民にさまざまな弊害があることは認識しながらも、貿易収支の赤字に苦しむイタリア政府にとって移民による送金が対外収支の安定に大きく貢献していたために、それを制限する措置をとることができなかったのです。この1902年の渡航禁止は、自由主義期のイタリア政府がとった唯一の例外的な措置でした。それだけコーヒー・プランテーションの状況を深刻に受け取っていたということがわかります。この措置によって、以後ブラジルへの移民は激減します。再び労働力不足に陥ったサンパウロ州は、イタリア人に代わる新たな供給源を東アジアに求めます。ご存知のように、日本からブラジルへの移民が開始されるのは1908年のことです。

その後、イタリアからブラジルへの移民は低迷しますが、第二次世界大戦後にイタリア政府はブラジルとの間に移民協定を結びます。その結果、バイア州などを中心としたブラジル北東部にイタリア移民が入植します。また、1980年代以降の経済危機に際しては、イタリアへの出稼ぎが行われるようになります。これはアルゼンチンと同様の状況ですし、またイタリア側から見れば、日系ブラジル人の「デカセギ」が起きた日本と同じ事態を迎えることになったといえることができます。

4. イタリア移民の比較史

最後に、本日の話のまとめとして、イタリア移民を受け入れ国別に比較するとどうなるかを考えたいと思います。

本日のお話の趣旨はアルゼンチンとブラジルにおけるイタリア移民を比較するというのですが、その前に、ヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国と比べたときのアルゼンチンやブラジルといった南米諸国におけるイタリア移民の特徴がどこにあるのかを見ておきたいと思います。

最初にも触れたように、19世紀後半から20世紀前半にかけての時期に関しては、ヨーロッパ諸国に向かった移民は北・中部イタリアの出身者が圧倒的多数を占めていたのに対し、イタリアからアメリカ合衆国への移民はその大半が南イタリア出身者でした。ところが、アルゼンチン、ブラジル、あるいはウルグアイなどの南米諸国の場合、南北を問わずイタリアの各地から移民が到来したという点に大きな特徴があります。出身地域というのはイタリアという国を考える上ではきわめて重要です。

統一国家としてのイタリアは1861年のことです。西ローマ帝国が崩壊して以来、イタリア半島とシチリア島、サルデーニャ島は常に複数の国家に分裂した状態でしたし、古代ローマの時代もローマがイタリア半島を統一してからそれほど時間をおかずにヨーロッパ・地中海世界に拡大しているので、今のような領域を持った国家は実質的に一度も歴史的に存在したことがなかったと言えるのです。しかも、単に複数の国家に分裂していたというだけでなく、北イタリアでは中世に多くの都市国家が存在した経緯から、比較的狭い地域を単位としてそれぞれ固有の文化を作ってきましたし、南イタリアでは国家的なまとまりが存在していたとはいえ、ナポリを中心としたイタリア半島南部とシチリア島ではかなり異なる文化を形作ってきました。もちろん、ダンテ以降の書き言葉としてのイタリア語や美術・音楽の流派などを介して、高級文化（ハイカルチャー）においてはある程度の文化的一体性、別の言葉でいえば「イタリア文化」と呼べるものがすでに存在していたとは言えるかもしれませんが、しかし、民衆レベルでは、たとえ1861年に国家統一が達成されたと言っても、地域ごとに個性を大きく異にする文化が並び立っている状態でした。たとえば、言語の面でも地域ごとの方言の差異は大きく、出身地域を異にする民衆が相互に意思を疎通させるのは容易なことではなかったのです。

アメリカ合衆国の場合は南イタリア出身者が多数を占めたため、ここでイメージされる「イタリア文化」はイタリア南部の色彩を強くまとっています。たとえば、食文化を考えても、スパゲッティやピザは典型的にナポリを中心とした地域に由来するものです。また1980年代以降、アメリカでブームとなった「地中海的食事」というのも、オリーブ油をベースにしているという点で、きわめて南イタリア的なものです。北イタリアでは伝統的にはラードなどの動物性油脂が多く用いられてきたのですから。これに対し、南米諸国ではイタリア移民の出身地域はきわめて多様でした。そのため、「多様なイタリア文化」が多様なまま南米に伝えられたということがのできるのです。

最後に、アルゼンチンとブラジルのイタリア移民を比較してみます。アルゼンチンが異種混交、ハイブリッドな文化を有しているという指摘はすでに紹介しましたが、そうしたハイブリッ

どな文化の一部として、イタリアの様々な地域文化が「イタリア文化」という形で意識されることなく、アルゼンチン文化の一部として溶け込んでいったところにこの国の特色があると考えられます。イタリアから到来した移民たちは自らが「イタリア人」としてアイデンティファイする前にアルゼンチンのハイブリッドな文化の中に入っていったので、アルゼンチンでは「イタリア系アルゼンチン人」というアイデンティティは長らく存在しませんでした。

これに対して、ブラジルの場合、異種混交、ハイブリッド化という要素がないとは言えないのですが、とりわけ南部三州の場合、イタリア出身者が比較的孤立した形で定住していったので、アルゼンチンに比べると「イタリア系」というアイデンティティが形成される余地があったと考えられます。実際に、2016年に私が訪れた町のなかにも、たとえばイタリア移民の末裔が多く暮らすパラナ州のロデオという町では、通りの名前を示す標識に緑・白・赤のイタリア国旗の色が用いられていて、私はとても奇妙な感覚を抱きました。ブラジル国内であるのにイタリア国旗が公的な場所に用いられているからです（写真1参照）。これは住民たちがイタリア系であることを強調したいからでしょうし、その意味では「イタリア系ブラジル人」と呼ぶべきアイデンティティが存在しているということになるでしょう。ただ、こうした動きが南部三州にイタリア人が流入してから150年の間、常に存在していたかという、それはまた別の話になると思います。アルゼンチンで「イタリア系アルゼンチン人」というアイデンティティが近年になって現れたように、比較的近年になってある種のエスニシティの誕生、あるいはエスニック・リバイバルが出現したという仮説も十分に成り立つからです。これは私にとって今後取り組むべき、一つの研究課題です。



写真1 パラナ州ロデオの町の入り口に掲げられたイタリア語「ロデオへようこそ」（2016年9月6日撮影）

もう一つ注目すべきなのは、第二次世界大戦において中立の立場をとったアルゼンチンと異なり、ブラジルは連合国側で参戦しています。日本、ドイツ、イタリアはブラジルにとって敵国となったわけで、よく知られているように、それに伴ってこれらの国の出身者に対しては敵国条項の対象として資産の没収といった措置が採られました。この時に、イタリア移民の末裔たちはどのような態度をとったのでしょうか。この問題はアルゼンチンには存在しない、ブラジル固有の問題として、あるいは、むしろアメリカ合衆国やカナダ、オーストラリアなどと共通する問題として、取り組むべきテーマであると考えています。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

〈参考文献〉

- 北村暁夫、1998、「ヴェーネトからブラジルへ——世紀転換期におけるイタリア移民の様態」、
山田史郎ほか、『近代ヨーロッパの探究1 移民』、ミネルヴァ書房、27-74ページ。
北村暁夫、2005、『ナポリのマラドーナ——イタリアにおける「南」とは何か』、山川出版社。
北村暁夫・伊藤武編、2012、『近代イタリアの歴史——16世紀から現代まで』、ミネルヴァ書房。
丸山浩明編、2013、『世界地誌シリーズ6 ブラジル』、朝倉書店。

(きたむら あけお 日本女子大学文学部教授)